

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	林 竹人（青森県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第108号
学位授与の日付	令和2年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学 位 論 文 題 目	絵師 高田敬輔が描く浄土の世界 —「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」を中心として—
論 文 審 査 委 員	主査 松永 知海（佛教大学教授） 副査 齊藤 隆信（佛教大学教授） 副査 藤堂 俊英（佛教大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

林竹人氏の博士請求論文『絵師 高田敬輔が描く浄土の世界—「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」を中心として—』（以下、本論文）は、絵師高田敬輔（1674—1755）の作品の内、法然の主著『選択本願念仏集』を初めて掛軸物に描いた『選択集十六章之図』と、浄土三部経の一つである『無量寿経』の変相図として描いた『無量寿経曼荼羅』の二つについての研究である。

従来、近世の仏教学や浄土宗学を明らかにしようとする研究は、経論章疏などの教理的研究や伝記類を中心とした文献資料による歴史的研究によって解明されてきた。その点で、林氏の研究は絵画資料を題材に、その思想的背景まで解明しようとした研究であり、非常に意欲的である。

序章では、先行研究を(1)美術史(2)浄土教教義(3)近世画論の3つの観点から分析して次の6点を指摘している。

- ①敬輔の画業が『敬輔画譜』の「高田敬輔翁畧伝」の域を出ていないこと。
- ②絵相が概説的で、典拠が不十分であること。
- ③敬輔を取りまく浄土宗僧侶との関係が考察されていないこと。
- ④皇族との関係性を検討し、敬輔を評価すること。
- ⑤「選択集十六章之図」の及ぼした影響を考察すること。
- ⑥「無量寿経曼荼羅」の及ぼした影響を考察すること。

これらの問題点を各章で明らかにしていくことが述べられている。

第一章では、敬輔の伝記資料や作品群を整理し、浄土宗僧侶の伝記資料を中心にそれらの関係性を明らかにしている。

第二章では、「選択集十六章之図」の全体構成と、敬輔の「選択集十六章之図」と同様の湖月『選択集十六章図説』・堀尾貫務『選択集十六章図略解』・慈門専阿『通俗図絵選択本願念仏集』・忍海画関通『和字選択本願念仏集』・銅版「選択集十六章之図」・関通解説文（『雲介子関通全集』所収）の7本の絵相と解説とを比較対照している。

第三章では、「無量寿経曼荼羅」を詳細に注釈した『大経曼荼羅開壇記』序文を参照しその制作背景と経緯を明らかにし、「無量寿経曼荼羅」の題賛・款記・絵相配置や標文と『大経曼荼羅開壇記』の総科とを比較対照している。さらに「無量寿経曼荼羅」の延享本と天保本との比較をして相違点を明らかにし、款記を書いた元秀尼や皇室との関係を明らかにしている。

第四章では、「無量寿経曼荼羅」各部分の絵相について『無量寿経』の経文を中心に『大経曼荼羅開壇記』を踏まえて検討を加え、敬輔が何をどう表現しようとしたのかを明らかにしている。

第五章では、「選択集十六章之図」・「無量寿経曼荼羅」の両図が後世にどのような影響を及ぼしたのかを浄土真宗系の「秘事法門」や『大経曼荼羅開壇記』に記述された「坐具」について、真言の諦忍と浄土宗の震純との論争を考察している。

終章では、上記の各章で明らかとなった点を踏まえて、林氏は、高田敬輔の描いた浄土の世界は念仏信仰の指針として、念仏行者が求める西方極楽浄土への＜道しるべ＞として「選択集十六章之図」があり、現世を厭い離れて阿弥陀仏とともに生きる＜行き先＞を表出したのが「無量寿経曼荼羅」であるという結論を導き出している。

本論文の目次構成は次のようである。

序章

一 研究目的

二 先行研究と問題点の所在

第一節 美術史の観点から

第二節 浄土教教義の観点から

第三節 近世の画論の観点から

三 研究の目的と方法

四 本論文の概要

第一章 絵師高田敬輔の生涯と主な画業と宗教的環境

第一節 絵師高田敬輔の生涯と主な画業

第一項 絵師高田敬輔の生涯と主な画業

第二項 主な仏画関係作品

第三項 小結

第二節 絵師高田敬輔の浄土教的環境

第一項 高田敬輔に影響を与えた浄土宗僧侶

第二項 高田敬輔・良照義山・明誉古礪・曇誉忍海との関連

第三項 小結

第二章 「選択集十六章之図」の概要

第一節 「選択集十六章之図」の全体構成と諸本との対比

第一項 「選択集十六章之図」の全体構成

第二項 「選択集十六章之図」作成の背景と経緯

第三項 「選択集十六章之図」の諸本

第四項 「選択集十六章之図」の注釈書

第五項 小結

第二節 「選択集十六章之図」の原版・注釈書・刊本の七資料の対比

第一項 「選択集十六章之図」の原版・注釈書・刊本の七資料

第二項 「選択集十六章之図」原版・注釈書・刊本（七資料）各章諸相の対比

第三項 「選択集十六章之図」原版・注釈書・刊本（七資料）各章諸相の特色

第四項 小結

第三節 「選択集十六章之図」部分構成と作成の背景

第一項 「第一 捨聖道歸浄土章」の絵相とその背景

第二項 「第二 捨雜行歸正行章」の絵相とその背景

第三項 「第三 唯念佛往生本願章」の絵相とその背景

第四項 「第四 三輩念佛往生章」の絵相とその背景

第五項 「第五 念佛現當利益章」の絵相とその背景

第六項 「第六 末法之後特留念佛章」の絵相とその背景

第七項 「第七 弥陀光明唯攝念佛行者章」の絵相とその背景

第八項 「第八 念佛行者必具三心章」の絵相とその背景

第九項 「第九 念佛行者行用四修法章」の絵相とその背景

第十項 「第十 來迎化佛唯讚念佛章」の絵相とその背景

第十一项 「第十一 約對雜善讚歎念佛章」の絵相とその背景

第十二項 「第十二 唯以念佛付属阿難章」の絵相とその背景

第十三項 「第十三 念佛多善雜善小善章」の絵相とその背景

第十四項 「第十四 六方諸佛證誠念佛章」の絵相とその背景

第十五項 「第十五 六方諸佛護念念佛行者章」の絵相とその背景

第十六項 「第十六 弥陀名号付属舍利弗章」の絵相とその背景

第三章 「無量寿經曼荼羅」の概要

第一節 「無量寿經曼荼羅」の全体構成

第一項 『大經曼荼羅開壇記』制作の背景と経緯

- 第二項 『大經曼荼羅開壇記』の靈應の「序」
- 第三項 『大經曼荼羅開壇記』の定月の「序」
- 第四項 『大經曼荼羅開壇記』の隨天の「序」
- 第五項 小結
- 第二節 「無量寿經曼荼羅」の各絵相の配置と概要
 - 第一項 「無量寿經曼荼羅」の連察の題賛及び右下部の款記
 - 第二項 「無量寿經曼荼羅」の各絵相の配置
 - 第三項 隨天『大經曼荼羅開壇記』の総科と高田敬輔「無量寿經曼荼羅」の標文との関連
 - 第四項 小結
- 第三節 「無量寿經曼荼羅」の題字及び流通文
 - 第一項 題字「無量寿經曼荼羅」
 - 第二項 左下縁の款記
 - 第三項 『無量寿經』流通文
 - 第四項 小結
- 第四節 「無量寿經曼荼羅」の款記書き入れの背景
 - 第一項 林丘寺の概要
 - 第二項 高田敬輔と皇室との関係
 - 第三項 小結
- 第四章 「無量寿經曼荼羅」の部分構成
 - 第一節 「明能説釋迦序正流三分」について
 - 第一項 「序分説法之相」
 - 第二項 「正宗説法之相」
 - 第三項 「流通説法之相」
 - 第四項 小結
 - 第二節 「述所説彌陀行成攝三段」の「所行」について
 - 第一項 「所行」の「勝因」
 - 第二項 「所行」の「勝行」
 - 第三項 「所行」の「勝果」
 - 第四項 小結
 - 第三節 「述所説彌陀行成攝三段」の「所成」について
 - 第一項 「所成」の「勝報」
 - 第二項 「所成」の「極樂」
 - 第三項 小結
 - 第四節 「述所説彌陀行成攝三段」の「所攝」について
 - 第一項 「所攝」の「凡夫往生」

第二項 「所攝」の「厭欣境界」

第三項 「所攝」の「勸善」

第四項 小結

第五章「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響

第一節 「選択集十六章之図」の及ぼす影響

第一項 「秘事法門」にも使用された「選択集十六章之図」

第二項 忍海画とされる「彩色版・「選択集十六章之図」

第三項 小結

第二節 「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響

第一項 古碕「大経曼荼羅図」との関連

第二項 震純・随天と諦忍律師との論争

第三項 小結

終章 高田敬輔の描く浄土の世界

一 念仏往生の《道しるべ》、「選択集十六章之図」

二 目に見える《西方極楽浄土》、「無量寿経曼荼羅」

三 さらに充実・発展のために

〔2〕 審査結果の要旨

審査過程において示された、本論文の評価と問題点は以下である。

本論文の成果の第一点は、高田敬輔の「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」の二点に関して、仏教思想や視覚伝道の視点からの専門的な考察が不可欠であるが、今まで本格的な研究に手が付けられていなかった。林氏の研究はこの未開拓の分野に目を向けた本格的な基礎的研究として評価できる。特に、敬輔と義山・古碕・忍海など、彼を取りまく浄土宗僧との関わりを明らかにしている点は大きい。

第二点は、絵相に表れた背景を関連の資料と対比させながら明らかにしている点である。各作品の全体図、その部分的拡大図の挿入、関連する他の絵入り文献との対照、その描写の根拠となる仏典や註解書の対照表、高田敬輔の人的交流を表にした整理など、論文のまとめ方にも説得力のある配慮がなされている。

たとえば、「選択集十六章之図」の第一「捨聖道帰浄土章」には難行道易行道が示されているが、その表現の根拠資料である『十住毘婆沙論』はじめ『大智度論』などの論疏を検証するだけでなく、義山の『和語灯録日講私記』の解説や『當麻曼陀羅述奨記』の絵相などにも言及して敬輔に与えた影響を指摘している。

また『選択集十六章之図』については、高田敬輔の手になる『選択集十六章之図』をはじめ、流布する転写本・摺本・彩色本等を調べ、所蔵に至る経緯を検討した上で、諸本の絵相の比較を行っている。その後に刊行された絵入りの『選択集』との関連や、『選択集十六章之図』が与えた影響にも分析が加えられ、敬輔の業績の広がりを知ることが出来る。さらに浄土真宗に伝わる秘事法門の中で、當麻曼荼羅や（一心）十界図と共に敬輔の『選択集十六

章之図』が使用されていたという指摘は、この図が浄土宗内だけでなく、作者の意図を超えて、他宗の伝道教化にも影響をあたえていた事例として興味深い。

『無量寿経曼荼羅』についても『選択集十六章之図』と同様に諸本を見出し、来歴の経緯を明らかにした上で、絵相の分析を行っている。その際、義山の『無量寿経随聞講録』を参照し、この図に関する随天の『大経曼荼羅開壇記』と合わせて、その制作背景を詳細に明らかにするという周到な論述がなされている。また図中にある皇女林丘寺二世元秀の書入れをめぐって、高田敬輔と皇族関係者との接点を明らかにしたことは注目される。

いずれも、関係資料を渉猟し、整理・検討した上で提示されている。

以上、林氏の研究成果を述べ、その評価される点を述べてきたが、問題点や今後の課題も残されている。

序章に述べる仏教美術史から見るならば、俯瞰してインド以来の絵解きや視覚伝道の視点にも言及してもよかった。

第二章で林氏が問題として取り上げた一つに、選択集の絵相の、第五章段「念仏現当利益章」の標章がある。選択集第五章の本文には「現当」の二文字が明記されていない。にもかかわらず、敬輔がこれを加えたのは第十一章の内容をこの第五章に加味させたものだと記述している。しかし林氏自身が記述しているように、敬輔が浄土宗学匠良照義山の指導の下に描いていることを考えあわせると、『選択集』理解に欠かせない浄土宗第三祖良忠の『選択伝弘決疑鈔』を参照するよう促された可能性は十分あり、義山撰の写本として伝えられる『選択本願念仏集講義』にもそれを裏付ける可能性も指摘される。

また、『選択集』の絵相のうち、第十三章段「念仏多善根篇」（154 頁）には、法然浄土教の立場からは廃捨される少善根の三人の僧侶が描かれている。その少善根を表す絵相は他にも瞑想する姿、写経をする姿など多くの表現が考えられる。それを敢えて仏を描いている画僧を描おり、画僧の師である古磻と忍海そして仁和寺で法橋・法眼に叙任された自分自身と読み取ることにも絵相から可能であった。

第三章・第四章の「無量寿経曼荼羅」では『無量寿経』には記述されていない「俱生神」についての考察や、時代背景を加味すれば、絵入り『往生要集』との絵相や「天下和順図」と仁和寺法親王との関連にも言及が望まれた。

以上のような問題点や今後の課題も少なからずあったが、林氏の本論文は、高田敬輔という画師が近世日本において浄土教典籍の視覚化という曼荼羅を通し、その思想的裏付けを詳細に検討し、さらに今日までに及ぶ影響を明らかにした大きな研究成果といえる。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。